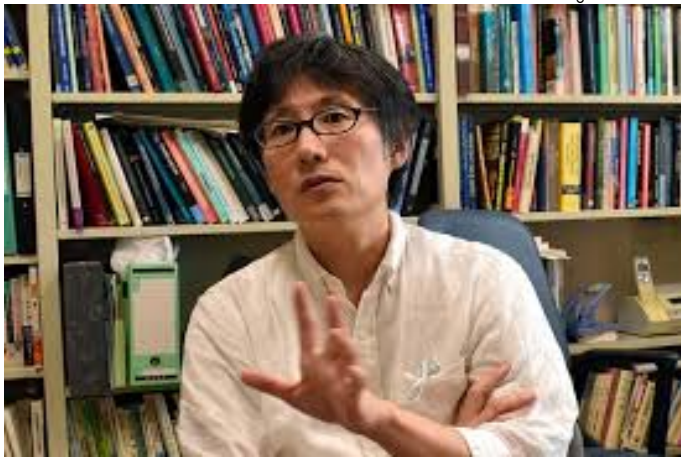


## 第5回

### ケア労働とB-I

同志社大 教授 山森 亮さん

去る九月二六日、オンライン哲学カフェで山森亮さんにお話を伺いました。多数の皆さんのご参加をいただき、活発な議論ができました。ありがとうございます。当初ご案内を差し上げていた段階で、財源の問題にはできるだけ触れないで、哲学的な議論をお願いしたい」との趣旨のことを申し上げていました。このことを財源のことは議論しないという風に理解された方もいらっしゃるかもしれません。不自由をお感じになったことだと思いません。申し訳ありません。干、言い訳がま



しいことを付け加えさせていただきますと、仮に一人十万円給付を恒常的にすれば、年間百兆円ものが故の予算が必要になるが、この赤字財政のごことから予算を工夫するのかわか」という議論を始めると、おそらく収集がつかなくなってしまふのではと心配しました。

山森さん 写真左上)は、ある特定の支出をどのような財源で賄うのかを論じるのは、第一に、あまり意味がなく、第二にときに有害でさえある」といわれまます。B-Iを考えるうえで制度設計にだけとらわれてしまつてはいけなけれども経済の原理を変えて行くこととするポテンシャルをB-Iの理念や哲学が持っていることをよく理解していなかったゆえの危惧だったことを思い知りました。一言お詫びや言い訳やらを書かせて頂きました。ご了解ください。世話人 野崎)

#### 第四回 ケア労働とB-I」の感想

●九月二日のハンナの講座 長岡京市の 手作り雑貨のお店「ハンナ」で行っている まちかどよろずミニ講座」(で、Fさんが持ってきた京大の藤原辰史氏によるベーシックインカムについての新聞記事をもとに少し意見交換していた矢先に、この講座のことを知って、大変タイムリーだということで、Fさんと共に参加しました。事前に山森亮さんの「ベーシックインカム入門」に少し目を通していたので、ある程度スムーズにお話を聞くことができたとは思いますが、まだまだ理解不十分な点が多くあり、勉強しなければと思えました。山森さんのお話で強く感じたのは、女性、労働者、障がい者など、社会的に厳しい状況におかれた人

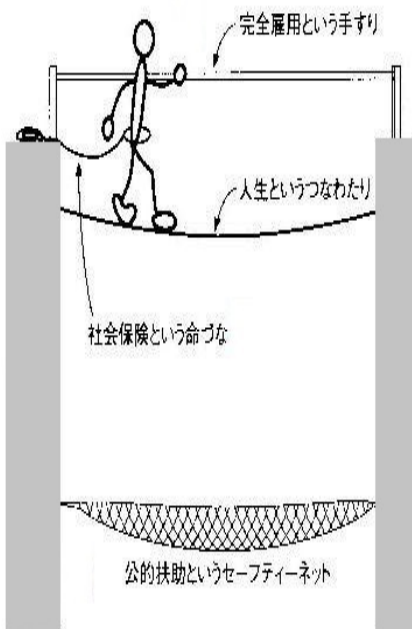
たちの理不尽な現状への思い・怒りと現在の社会保障・社会福祉制度への不信・疑問です。その点はとも共感できる点ですが、それ以上に共感できたのは、ベーシックインカムという考えが、現在の労働観、社会観、価値観、自由や人権に関わる考えなど、人々の社会意識や思想に深く関わるものだという点で、それが、歴史的に女性や労働者などの主体的な運動によって形づくられてきたものだという点です。生まれ落ちた状況に関係なく、誰もが、自由にしたいことができる社会が、ベーシックインカムの目指す社会だという理念は共感を覚えます。山森さんのお話のあとの参加者の皆さんの活発な意見交換を聞いて、資本主義や民主主義が危機に瀕し、労働をはじめ自由・平等や人権の意味が問われている現在、この地球に生きているという共通の基盤のもとに、現在の課題や社会的問題について共に考えることができる、今回のような草の根の「コミュニケーション」の場はとても大切だと感じました。ハンナの講座も小さな空間ですが、草の根のコミュニケーションの末端につながっていければと思っています。(MU)



山森亮 『ベーシック・インカム入門』光文社新書

●今回の哲学カフェは、テーマが現実的な政治的争点にもなりうる、ベーシックインカムに関するものでしたので、議論が対立したり、経済学的な細かい議論に入り込んで共有しにくいものにならないか、心配していましたが、さいわい、講師の山森さんに、上手に整理したり説明していただいたおかげで、ベーシックインカムの基本的な考え方について、ある程度の理解を共有できたように思います。特にベーシックインカムが魔法の杖ではないこと、また、ベーシックインカムの考え方の重点をどこに置くかについて、ある程度の幅があることについても、よく理解できたように思います。とくに今回は、議論にさまざまな立場、投資家の視点、政策的視点などの方が参加していただいたこともあり、今の日本社会で、社会保障に関する新しい制度設計の実現にむけて、立場を超えて考えていく可能性について、少しでも、希望を感じることができました。ただ、逆に、ベーシックインカムの原理の思想的な意義をどこに求めるか、労働の意味、ケア労働の意味をどうとらえるか、あるいは、その考え方を、実際に社会で、しっかりと共有できるかどうかという

点については、まだまだ議論が必要だなと感じました。個人的には、入権」とか「権利」という言葉で語られていることを、もう少し実質的な言葉で置き換えていく作業を、対話の中でやっていかなければならないと、感じています。これにつながる問題として、世帯単位の給付対個人単位の給付の問題とからめて、家族原理というもの、どう考えていくかについても、今回参加いただいたようないろいろな立場の人と、ひきつづき話し合ったり、深めたりしたいと強く思いました。講師の山森さん、参加していただいたみなさん、どうも、ありがとうございました。(NA)



●山森さんの話は分かりやすく興味深いものでした。英国の炭鉱労働者出身の女性が五〇年前に生み出した考え方「ベーシック・インカム」が、「格差の時代」を突き破るコンセプトとして、「再生」したというのは、時代の閉塞の深刻さを物語っていると思います。でも、日本では正直、しつこくきていないのは何故でしょう。生存権や権利としての福祉さえ、未だ定着していないから、と



佐々木隆治編著 『ベーシックインカムを問いなおす』法律文化社

いうだけではない気がします。もっと日常生活の即した日本的な思想（言葉）が求められているのでしょうか…。(M)

●山森先生の講習はOHP等で良く理解できました。又その後の討論会も「環境保護の立場」の方の説明も役立ちました。(NO)

●山森さんのお話をとても興味深くお聞きしました。ケア労働とベーシックインカム」という話題の意味が当初分かりませんでした。今回の話で何とか理解できました。私はB-の考え方、最低所得保障・負の所得税)を、初め反社会主義者のフリードマンMから学んだので、かなりB-を警戒しています。私の理想とする相互扶助・互助互恵の社会にとって、ケアは、労働ではなく人間としての生き方（援助・道徳）であると思っています。しかし、B-の制度化は、介護保険の制度化と同じように社会の福祉的絆を低下させるのではないのでしょうか。(ON)

みんなにお金を配ったら  
ベーシックインカムは  
世界でどう議論されているか？

みすず書房



●「コロナ禍で国の対応に関しての様々な意見を聞き、自分自身、国家とは何かと改めて考えるようになりました。非常事態宣言でお店を休業して、収入も途絶えてしまっている五月にいつも通り納税の通知がやってきて、きっちり税金の取り立てはあるのだと気分が暗くなった感がありました。その後の一〇万円の支給はまだ年金受給の年齢ではない自分には安心感がありました。しかし住民登録が支給条件であり断念した方もおられる問題がありました（「コロナ禍の前からベーシックインカムを省略して書きます）」には興味があったのですが、この「一律支給で「層」関心が深まった」と思います。今、お店に就労支援事業所さんの商品



[写真上]山森さん提供。ジュリア・メインウォリングさん。壁に掛けられた娘さんと写っている写真は、1970年代に既婚女性として初めてロンドンの公営住宅の契約者として 裁判で認められた日に、新聞記者に撮影されたもの。

を置いています。売上が利用者さんの賃金に反映されることので、たくさん売らなくては」という事になっていくのですが、Bーの制度があったらハンディキャップがあったり体が弱かったりして働くペースがゆるりの人も、少し余裕を持って安心して働けるようになるのではないかと単純に思ったりもしました。この講座の後に何人かの人にBーの事を話してみました。それは面白いね。もっと知りたい」と肯定的に受け止める方がいる。一方で、税金がそんな風に使われるのは公平ではないと思う層、たぶんある程度所得があって税金をたくさん納めている方も指すのかな?」がいるでは」とおっしゃった方もおられました。講座の中でどなたかがお金持ちとは「何十億」のレベル、それは正当な労働の対価なのか?などの話をされていたように思うのですが、記憶違いならすみません。(山森さんも以前にあるインタビューで資産について、今作り出したものに対する対価のように見えるが、実際は過去の人たちの積み上げの上にある、共有財産」というようなことを述べておられました。実際、コロナ禍で過酷な労働を強いられる方がいる。一方で、株価が上がって儲かる人がいる・・・。それこそ公平ではないと思うのですが、今回Bーを考えることを通して私自身ははっきりした事は、人間の価値をどう見るかということでした。人は生きてることそのものが誰かの心の支えになったりするもので、生まれてきた人には最低限の保障をする国家」という考え方がもっと普通になれば、日本のように生活保護を遠慮して受けたりする風潮もなくなるし、自分の勝手な思い込みで役に立たない人間だと切り捨てて起こる恐ろしい犯罪もなくなるのではないかと感じました。(F)

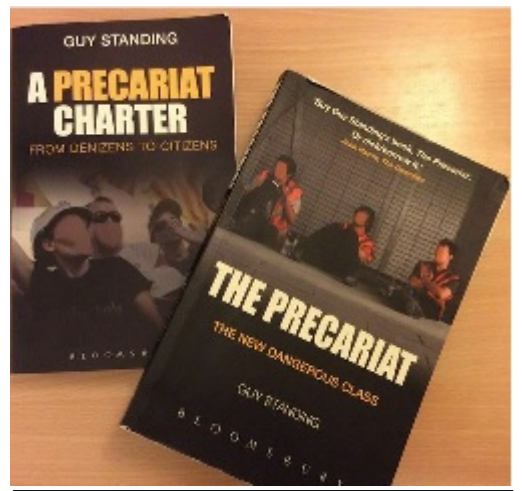
●今回の山森さんのお話しを心待ちにしている矢先、報道番組での新首相のフラインクのひとりのネオリベラル経済学者からのBー導入論の発言が巷で話題になりました。山森さんはそのことにも質問があると思うので話されました。参加者のひとりから、Bーは右から左まで賛成する人々がいるという発言がありました。が、まさに、問題はそこにあり、その根拠が社会保障という観点に立つはずのものが、経済効率という観点に立つ基の定義をはずれた別物のBーが「小さな政府」に向かうためのツールとされ掲げられています。また、山森さんが他で話されていた労働組合の人々の労働崇拜のための「非物質的労働」という概念の躊躇、社会民主主義者といわれる人々の現金の給付よりサービスや現物給付のほうが良いというメンタルスタンス。これらのことを考えると、この国の今あるどの政党が山森さんの言うBーに賛同するのだろうか。アントニオ・ネグリの「生きる」と自体が報酬の対象になる」という言葉を著書の中に見つけ、ついて行くしかないと思いました。(O)

お金のために  
働く必要がなくなったら、  
何をしますか？

ベーシックインカムは  
**夢物語か**

お金・労働・社会保障・  
所得・個人の生き方を問い直す

エフ・シユミット 山森亮 堅田香緒里 山口純  
エフ・シユミット  
『お金のために働く必要がなくなったら、何をしますか?』 光文社新書



【写真上】山森さん提供。

## 「プレカリアート憲章」

●ベーシックインカムについて、一年ほど前に借りて読んだ本が「ベーシックインカム入門」だったように思います。その時は漠然としか頭に入ってこなかったのですが、今回、山森さんのお話を聞き、すべての人に、無条件で、普遍的に、個人単位で、尊厳を持って生活を営むに足る所得を給付する「ことが一人一人の生き方にどんな可能性が生まれるのか、逆に言えば、その可能性がない現状の中、過去も含めて」での様々な問題、課題に改めて気づかされた部分がありました。セーフティネットが準備されている（生活保護）」とひとり一人が生活する権利が保障されている」は根本的に違う。差別や社会的な構造の中苦しむ女性たちが「ベーシックインカム」を訴えたことに感動しました。自助、共助、公助」と言っている人たちにもこの話聞いていただきたい。(S)

●ベーシックインカムというどうしても財源等、経済的な側面で議論を見聞きしていたので、今回は思想的な立ち位置で皆さんとエンゲージメントでき大変良い時間をすごせました。また、自由・平等等の考え方

が確立された歴史観とも並列に思考する機会も頂けたと思います。

追伸、EGS等サステナブルな文脈な話も少し触れさせていただきましたがご要望等あればEGS・SDG投資といった視点でエンゲージメントさせていただきます。M)

\*お問い合わせなどがありましたら世話人までご連絡ください。

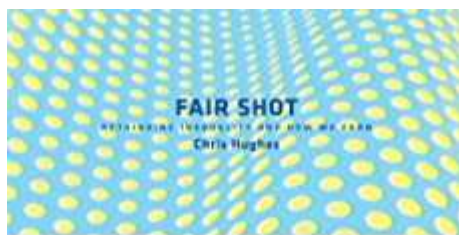
●他人の幸せは、自分の不利益。…という風潮になってきたのは、いつからだろうかと考えながらお話を聞いていました。生活保護しかり、子ども手当しかり。わたし」が主体的に関わりを持ってないと感じる。本

当は関わっているのですがあらゆる場面を通じ、不平等」への不満が澱のように溜まっていついてるので

しょう。これが「絆」社会の実態かと思うと悲しい気持ちになります。ごく閉じられたコミュニティの中でのみ成立する「許される」絆は、ひるがえって敵意を生み出します。かつて「同情するなら金をくれ」というセリフがありました。支える・支えられるの関係性には限界があるんだとつくづく感じさせられます。そこで今回のBですが、これはこうした既存の関係性によるものではなく、「生きる」という土台を根底から転換しようというもののように受け止めます。件の経済学者が語っていたように、何かと引き換える「ものではないでしょう。TN)

●かつて二〇一〇年前後にBの議論が盛んだったように思う。クリーマンショックを受けて市民の生活が相当大変な時代だった。年越し派遣村」が話題になったのもその頃だった。現在再びBブーム？)が起きているのかもしれない。すなわち、格差社会の矛盾が大きくなっていることによるのだろう。と

で、日本型雇用システムという言葉があるが、新卒一括採用・年功序列賃金・終身雇用の三つがその象徴である。戦後の経済成長を支えたのは紛れもなくこの日本型雇用システムだった。平たくいえば、企業に忠誠をつくし正社員となって家庭を築く、一軒家を手に入れ、子どもに高学歴を付けることで「二上がり」の人生がモデルであったのだ。それが制度疲労を起し非正規という働き方でどんどん格差が広がっているという現実。また世帯を中心とする日本の福祉政策もこれと同様だといえる。Bの議論が、第二ブームになっていることなのでないだろうかと考えている。(YN)



1%の富裕層のお金でみんなが幸せになる方法  
 実現可能な保証所得が社会を変える

フェイスブック共同創業者 クリス・ヒューズ  
 著 片岡 洋一 訳

ビル・ゲイツ 絶賛！

クリス・ヒューズ

『1%の富裕層のお金でみんなが幸せになる方法』 ラビアンティン 著

二〇二〇年の問答連・哲学力フェは第五回を以って最終回となりました。多数の皆さんのご参加ありがとうございました。

